

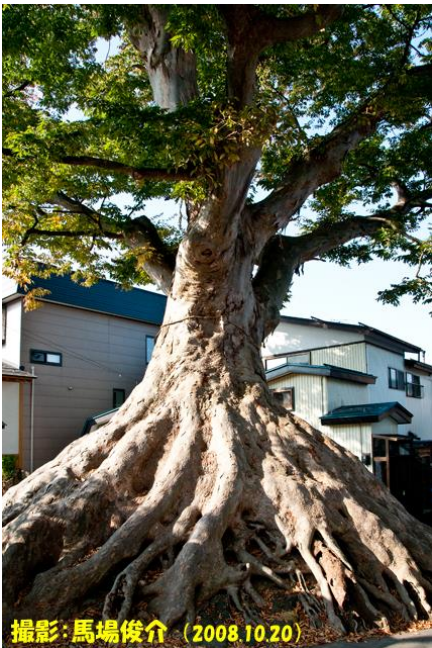
秋田県

街道 1

秋田の最大の特徴は、全国一保存状態の良い一里塚群が見られることである。県内の一里塚そのものは13基と隣県の岩手の87基と比べ格段に少ないが、オリジナルの塚木の残るものが6基あり（全国では37基）、比率は高い。塚木は、サイカチが3基、樺が3基である。サイカチは、茶屋っこ一里塚（大仙市、慶長9（1604）、県史跡）**A**と十六沢一里塚（大仙市、江戸期）**A**と安城寺一里塚（美郷町、江戸期）**A**、樺は、愛宕町一里塚（湯沢市、慶長9（1604）、県史跡）**A**と湯の原一里塚（湯沢市、正保4（1649）、市史跡）**A**と六郷一里塚（美郷町）**A**である。サイカチは全国各地で自生するマメ科の落葉中木である



提供: 大仙市教育委員会



撮影: 馬場俊介 (2008.10.20)



撮影: 馬場俊介 (2008.10.20)



撮影: 馬場俊介 (2010.6.12)

が、塚木の形で残っているのは秋田県だけである。3基の中では十六沢一里塚のサイカチが最も立派である。樺の3基は三者三様で何れも素晴らしい。愛宕町一里塚は土塚を根が覆い尽くした形態は全国で唯一無比の存在、湯の原一里塚のしめ縄の巻かれた太い幹の厳かな雰囲気も魅力的である。

街道 2

秋田は道標の少ない県だが、全国的に見てもユニークな存在が、十文字の狸々道標（横手市、文化8（1811）、市有形）**B**である。狸々は中国の伝説上の動物で、人の言葉を解し酒を好むとされるが、酒甕の全面に4つの方向を書いた奇抜な道標は、何も目印のなかった街道の交差点部に大きな福音となり、この場所が交通の要衝として栄えるきっかけとなったと言われる。道標が福を招いた稀有な事例である。

街道 3

南部藩は隣接する各藩と領土紛争を起こしているが、秋田藩とは延宝2（1675）、小坂境である袈裟掛坂の境界の位置が問題となり、藩同士の武力衝突の危険を避けるため幕府が裁決に乗り出した。延宝5に検分が行われ、境目論地に墨引きした絵図が南部・秋田両藩に下付され、双方の協議で6つの土塚が築かれた。現存は3基、よしの塚（小坂町、延宝5（1677））**B**のみが見学可能である。

舟運 1

日本海側の舟運遺産の代表は日和山の方角石だが、秋田県には2基現存する。沖の嶋の方角石（にかほ市、江戸期?、市史跡）**B**と五輪船見台の方角石（能代市、文化年間（1804-17）、市史跡）**B**である。

農業 1

農業用水と同時に生活用水でもあった滝ノ頭用水



（男鹿市、文政9（1826）頃）

Bは、データ上は全長約3キロと何の変哲もない小規模な用水路だが、全国の99%の用水が圃場整備により無機質な水路となり果てた中では、往時の姿を留める貴重な存在である。

鉱業 1

秋田には、全国有数の尾去沢鉱山、院内銀山の二つがあり、それぞれ近世の遺構として、二尺三尺坑道（鹿角市、慶長4（1599）以降）**A**と大切疎水道（湯沢市、宝永4（1707））**A**が現存する。二尺三尺坑道（下の写真）は、金山からスタートし黄銅鉱へ変遷したもので、観光地化されてはいるが、江戸時



代に掘られた坑道が完全な形で多く残されている。一方、大切疎水道は、鉱山の排水隧道としては佐渡金山の南沢疎水道と同系列にあり、同程度に稀少で、完成年も11年遅いだけ、長さは500mも長いのに、片や国史跡、片や無指定で、平成14のアクセス橋崩落後は接近不能のまま荒廃化が進んでいる。

防災 1

東北を代表する土木遺産の一つが飛の波除石垣（にかほ市、宝永元（1704）、国史跡）**A**である。前者は、波打ち際を通る北国街道とその奥の水田を浸食・決壊・塩害等から守るため、本荘藩によって築造された。径30～50cmの石約2万個を用いて築堤したため、地元では「万石堤」とも呼ばれている。波の荒い日本海側の東北を象徴する遺産である。



衛生 1

六郷湧水は全国屈指の湧水群である。生活用水、農業用水と使われ方は様々だが、今でも活用されている点が素晴らしい。御台所清水（美郷町、江戸初期）**A**が生活用、機織清水（美郷町、天明8（1788）以前）**A**が農業用の代表的存在である。

